石櫻新聞

発行所
盛岡市長田町7の60
岩手高等学校
岩手中学校
出版委員会
責任者 佐藤敬史
印刷所 山口北州印刷

社史 年史 単行本 機関紙 カタログ パンフレット ポスター 新聞
山口北州印刷
盛岡市青山四丁目㈣0585

昭和五十六年度 前期石桜会役員

堀口君

大沢田君

小原君

前期石桜会役員

四月二十五日に石桜会役員改選が行われ、前期役員が次のように決定した。すでに認証式を経て、新しい体制で活動を開始した。

新役員は次の通りである。

佐々木君

三上君

◎執行委員会
会長 小原良猛
副会長 大沢田毅樹
書記 堀口豊
　　 三上欽市
会計 佐々木和洋
　　 田口靖
○執行委員 下田人史
　　 渡辺要
　　 飯岡克
　　 荒川貴史
　　 佐藤敬史
　　 吉田達
　　 泉山勝彦
　　 工藤亨
　　 平子剛志
　　 熊谷幹雄

◎常任委員会
○生活委員会
委員長 渡辺要
副委員長 細川伸一郎
　　 粕谷昌弘
○学習委員会
委員長 飯岡克
副委員長 高橋直
○図書委員会 戸田一
委員長 荒川貴史
副委員長 馬場正人
　　 川守田雅啓
○出版委員会
委員長 佐藤敬史
副委員長 遠藤英利
　　 皆川武
○放送委員会
委員長 吉田達
副委員長 堀口豊
　　 沢村慎
○文化委員会
委員長 泉山勝彦
副委員長 幅信明
　　 山田壮一
○体育委員会
委員長 工藤亨
副委員長 野場孝
　　 工藤剛

生徒会長になって

小原良猛

現在の世の中には種々の音楽が氾濫しています。ROCK'NROLL からPOPS・クラシック・フォーク・エトセトラ。

ロックやポップス、そして今はやっているニューウエイブなどの原点は、ビートルズが確立した、とある雑誌に評論家が書いていました。それが、必ずしもそうだとは私は考えておりません。しかしまちがいでもないような気がします。どんなに目新しく聞こえても基本的なものは、かわっていないということだろうと思うのです。

なぜこんなことを書いたかというと、このようなことが、身の回りには、たくさんあると感じるからです。一例を上げると我が校の学校行事にしてもそうです。応援歌練習、遠足、球技大会、文化祭など伝統と言えば聞こえはいいでしょうが私は伝統と言いきってしまうにはなにか引っかかるものがあるのです。

伝統と、ただなんとなくというのはまったく別個のものであるのですが、このごろの学校行事には、熱意というかやる気というかそんなものが感じられないのは、みんな分かるだろうと思います。私も会長になる前は、「めんどうくせえなあ」と思っていた一人でありました。別にやらなくてもいいじゃないかとも考えておりました。しかし会長になってみて行事を運営するサイドにかかわると個々がそのように思っていることが、ものすごく行事運営に、大きな障害であることを痛感するようになりました。それと行事の必要性も少しですがわかりかけてきました。それはコミュニケートであることは分っていましたが、ただのコミュニケートではなく横のつながりはもちろんのこと、上下の関係、そして先生方との体のふれあいであるのです。もう一つ、行事は、渇いた喉をうるおす冷たい水のようなものでもあると思うのです。私達学生の本分は勉学であります。毎日勉学に精を出していれば当然のように生活が味気なくなります。そこに一息入れるのが、行事であると思うのです。

冷たい水である行事が、それほど盛り上がらないのは、私達の普段の生活が適当に潤っているからだと思うのです。潤っている喉に水をのんでも、それほどうまくは感じないものです。

このようにある行事を一つ始めることは、非常にたいへんなことであると思います。昔の先輩たちは、長年かかってこれらの行事をつくってきたのでしょう。だから一年の各行事は、そんなに手間もかからずに行うことができます。

今、私達がやっていることは音楽の世界よりもおとっているようです。基本はかわらないけれども、色々な新しい音が一日ごとに出てきています。しかし私達は昔から目立って変わらずただなんとなく、その行事をしているだけのような気がします。

生徒会活動の細かい部分にしてもそうです。今学校内では、たくさんの色々な問題があります。その原因は各自の種々の行動、対象に対する無気力さであると思います。そしてそれは、伝統ある行事を伝統として受け嗣ぎ発展させるのではなく惰性で続けていることの原因でもあります。

原因は分かっています。原因不明の病気を直すよりも風邪を直す方が楽にきまってます。原因がはっきりしていて、その上生徒会という医者までいるのです。あとは直して行こうという気持ちだけだと思います。どんな小さな問題でもほっとけば、大きな問題になります。生徒会なんてそんな大げさなものじゃないのです。ただその使い方、運営のしかたが、よく分かっていなかっただけのことと思います。

一人の勇気ある発言が、いまの生活をより良く変えるのです。生徒会役員はそのまとめ役であります。もっと生徒会組織を見直し、一人一人が目を向けることによって、それはどんどんと大きなものになります。生徒会活動を大きくしてゆくのは他の誰でもなくあなた自身なのです。

新任の先生

質問事項
一、担当教科
二、出身校
三、趣味
四、現在の生活
五、生徒に一言

○八重樫律幸先生

一、美術
二、和光大学
三、彫刻
四、岩手大学の聴講生
五、高校生としての自覚をもち行動に責任を持ってほしい。

○吉田文明先生

一、国語
二、都留文科大学文学部
三、アイスホッケー
四、独身
五、皆、もっと意欲を持とう。

教生来たる

六月二十九日から七日十一日にかけて本校に五人の教育実習生が来られた。

編集部ではこの機会に、国語の和田先生、地理の亀山先生、政経の米沢先生、物理の山口先生に次の様なインタビューを試みた。

ご承知の通り五人とも我が岩手高校の卒業生である。

編集部 まず本校で教育実習された感想はどうですか。

松本 学校の雰囲気は、昔と同じですね。

山口 岩高独特の雰囲気ってあるよね。

山口先生

編集部 実際に授業をされてみてどうですか。

松本 実際授業していてね、授業を聞いているのか聞いていないのかよく分からない人がいっぱいいて非常にやりにくいと思った。見てると気迫がないんですね。やっぱり目標をもって学校に来てほしいと思う。

編集部 初めて教壇に立たれた時の感想は？

亀山 俺は教室に行くまではあんまりあがらなかったけど、入って第一声を発した時はあがってしまったね。

亀山先生

編集部 岩手高校の生徒についてどう思いますか。

和田 僕らが高校生だった頃の姿をそのままみているようで面白いような変な気持ちがします。

亀山 一年に言っておきたいんだけれども、一年生というと入学した時は希望をもって入るわけだけれども、ところが段々岩高の雰囲気になれて来て、その希望とか夢が薄らいで来る。二年になると一年の時の気持ちが全然なくなっているという感じが強いんだね。もう一回その、二年生になる時に頑張ってほしいんだね。皆進学すると思うから、もっと本気で徹底してやって欲しい。

編集部 大学での生活はどうですか。

松本 いたって充実してる。

松本先生

和田 僕らなんか岩高で三年間くらして来たからね。あの頃は昔の校舎だったしね、大抵の事にはたえられますね。

松本 それが石桜精神だったんだね。

亀山 大学生になって岩高の生活が生きてきた。

編集部 今の岩高を昔とくらべてみてどうですか？

松本 極端には変ってはいないね。

山口 校舎だね。一番変ったということ。

松本 凄く近代的な校舎になったけど、新しい校舎ができて古い校舎が忘れ去られたっていう事が変化かな。

亀山 古い校舎もそれなりに楽しかったしね。

編集部 岩高と他の高校を比べて見てどうですか。

松本 岩高の生徒はのんびりしすぎている。何事に対してもおっとりしていてどこか抜けていて気がつくのが遅い。

亀山 現実に気付かなければならない。

編集部 もし岩高が男女共学になったとしたらどう思いますか？

松本 いいんじゃないですか。

山口 このままが好きだ。このままだから岩高といえる。

亀山 男子校のいいところもあるし……。

米沢 女子がいないと楽しくないから共学になった方がいいと思う。

米沢先生

亀山 でも岩高は昔からの男子校なのだから、昔のOBから見ればいやなんじゃないかな。

山口 やっぱり岩高という気質があるからね

編集部 では最後に在校生に一言ずつおねがいします。

和田 誇りをもって高校生活を送ってほしい。

和田先生

亀山 人に負けたくないという気持ちを持っていてほしい。

米沢 岩手県に岩高ありと言われるようにすべきだと思う。

松本 岩高を好きになってほしいと思う。好きになれば学校に対する誇りも持てるだろうし、そういう風にしてクラブでも勉強でも伸びてゆくだろうと思うからね。そうして自分自身とか、回りの人たちを互いに向上させていけば立派な学校になると思う。だから石桜精神をフルに発揮させてほしい。

山口 岩高生として自信なり誇りなりを持って、その高校生時代に何をやるのかという目標を持って進んで欲しいという事です。

敬称略（七月七日収録）

◍石割桜◍

今や夏、夏と言えば高校野球と言われるほど、夏の風物詩として定着した感があります。その魅力は何といっても球児たちの真剣かつさわやかなプレーにあるでしょう。これからお盆にかけて全国のファンは甲子園に耳目を集中することになりそうです。◆ところでその甲子園に向けて、最近色々と〝異変〟が起っています。野球部員の不祥事による出場辞退が相ついだことです。その数は全国で三十六校にものぼり、中に強豪の浪商、高知商、天理、倉吉北などが含まれていますし、県内においても黒工、宮古水産が辞退して衝撃を与えました。◆辞退組のケースとしてはさまざまですが、変わり種は、都立桜町高校の場合の選手たちの成積の悪さを理由とした辞退です。これはそれまでの暴行、万引き、しごきなどの事件を起こした野球部の出場取り消しとは明らかに違っています。それゆえ、当の桜町高校の父兄、後援会、OBのみならず全国的に大きな反響を呼んでいます。論の是非はともかく、過熱気味の高校野球界に一服の清涼剤が投じられた思いがします。勉強を怠るという、学生の本分にもとる点を問う出場辞退は、高校野球を「教育の一環」とする大義名分に鋭く迫っているからです。◆野球以外にも多くの運動部があって、それらの競技では出場辞退という話は聞いたことがない。高校クラブ活動のあり方の面でも、今年の出場辞退事件が過熱した現状を考え直すきっかけとなれば、それなりの意義はあろう。

高校総体開かる

◆……第33回岩手県高校総合体育大会が、前期六月六日～八日、後期が六月十三日～十四日に分けて各地で行われた。我が校は卓球競技で個人戦、ダブルスの二選手が東北大会、インターハイへ、また七月に行われた水泳競技で二選手が東北大会へ出場権を得た。……◆

卓球

さる6月6～8日に大船渡で高総体、6月25～27日に福島県で東北大会が行われました。

◎高総体
。団体戦
一回戦
岩手高校4―0福岡高校
二回戦
岩手高校4―3盛岡四校
三回戦
岩手高校1―4盛岡商業
ベスト8
。シングルス
一回戦
（岩手）（釜工）
作山0―2川端
（岩手）（大船渡高）
米沢0―2金野
（岩手）（関一）
松村2―0岩本
二回戦
（岩手）（花北）
松村2―0菊地
三回戦
（岩手）（専北）
松村2―0金野
四回戦
（岩手）（東和高）
松村2―1滝本
準決勝
（岩手）（盛商）
松村1―2阿部
《松村―ベスト4》
ダブルス優勝
。ダブルス
一回戦
（岩手）（大船渡高）
米沢2―0新沼
松村2―0永沢
二回戦
（岩手）（花北）
八木
米沢2―0秋室
三回戦
（高田高）
（岩手）
松村2―1村上
米沢2―1吉田
四回戦
（岩手）（盛商）
松村2―0川村
米沢2―0阿部
決勝
（岩手）（東和高）
松村2―1滝本
米沢2―1菊地

◎東北大会
。シングルス
一回戦
（岩手）（向山高）
松村0―2赤江
。ダブルス
一回戦　不戦勝（シード）
二回戦
（岩手）（青森山田）
松村2―1三田
米沢2―1三浦
三回戦
（岩手）（日大山形）
松村2―1狩野
米沢2―1大西
四回戦
（岩手）（三本木）
松村0―2高谷
米沢0―2岡山
《東北大会ベスト4》

米沢選手

松村選手

バスケット

四月二十九日盛岡三高体育館で行われた。

岩手40（12―24　28―39）58雫石

ラグビー

私たちラグビー部一同は6月13、14日の高総体に臨みました。一回戦盛一と対戦し、点のとれないゲームになり、前半20分ゴール前で味方がペナルティーをとられ3点。またゴール前ペナルティーをとられて計6点。後半は0―0という結果で合計0―6で負けてしまい、くやしいといっている間もなく、翌日、敗者戦へ臨みました。対水沢というので、新チームになってから一度も当ったことのないチームなので、気をひきしめてあったところ、16―4で勝ち、Bブロックに残ることができました。

一回戦
岩手0（0―6　0―0）6盛一
敗者戦
岩手16（16―0　0―4）4水沢

体操

去る六月の十一、十二日に高総体が行われました。選手の小泉は実力を十分発揮できず、最後の大会であるのに不本意な結果に終わりました。

大会成績　小泉修二
個人総合　十位
あん馬　三位
ゆか　六位

水泳

決勝種目
200背泳　石川義勝　6位
100平泳　丸山豊　5位
200平泳　丸山豊　7位
800リレー　石川、丸山、米沢、吉田　8位
400メドレーリレー　石川、丸山、高橋、吉田　8位
400リレー　石川、丸山、米沢、吉田　8位
総合成績　10位

山岳部

六月十二、十四日、早池峰山縦走コースで行なわれた。

結果は71点（100点満点）でBブロック第四位であった。三位の学校とは4点差で惜しくも入賞を逃がした。

硬式野球

七月四日、県営球場で行われた。

岩手0110002000
盛三0001201001×
岩手4―5盛三

剣道

剣道競技は6月13、14日と盛岡三高体育館で行なわれた。

団体戦　予選リーグ
岩手1―4軽米
岩手1―3宮古
岩手5―0紫波
この結果決勝リーグ進出ならず。
個人戦
一回戦
（岩手）（水沢）
浅沼2―1千田
（岩手）（大船工）
小原2―0菅野
2回戦
（岩手）（宮古川井）
浅沼0―2中仁沢
（岩手）（浄法寺）
小原2―1三浦
3回戦
（岩手）（久水）
小原1―2香木

柔道

柔道は六月六、七、八日盛岡市営体育館で行なわれた。

。団体戦
一回戦
岩手5―0伊保内
先　高館○有効　小笠原
次　高橋○一本　岩沢
中　昆○―　大久保
副　小西○―　古館
大　佐藤○―　市橋
二回戦
岩手1―2久慈
先　沼田―○松本
次　高橋×北田
中　昆×田中
副　小西―○大崎
大　佐藤○―　越戸
。個人戦
軽重量級
予選リーグ（通過）
高橋（岩手）×―那須（東大）
高橋（岩手）○―笠原（水工）
決勝トーナメント
一回戦
高橋（岩手）僅差●駿河（花農）

軟式庭球

日時　六月八日（月）
場所　北上市常磐台コート、黒沢尻高校テニスコート
結果
団体戦
二回戦
岩手1―2水沢工
吉田・金　4―0
田中・佐々木2―4
菅野・村井　2―4
個人戦
一回戦
吉田・金　3―4
（黒沢尻北高校）
田中・佐々木2―4
（宮古高校）

ハンドボール

ハンドボールは、六月十

岩手山登山

今年の岩手山登山は、七月一日、二日の両日、二学年の生徒一五〇名、引率の先生方十五名、山岳部の三年生二名、地元の山岳会の二名、総員一六九名が参加した。

登山の当日、早朝五時、学校校庭に集合。早朝のため、寝ぼけ顔の人も、そうでない人も、これから始まる登山に、目が輝いているのがうかがえる。学校前からバスに分乗し、午前六時頃馬返し着。寒い。霧とも雨ともつかないような天気だ。皆思い思いの上着を着、準備体操の後、いよいよ登山開始。

三合目あたりから急に日がさしはじめ、よけいに汗をかくが、ふと見おろせば我々はほう雲の上に出ていた。見上げれば、さっきまでとはうって変って快晴である。時おり吹く風のなんと冷たくてさわやかなことか。

五合目の御蔵石を通過、この頃になると木も背丈がだんだん低くなり高山を感じさせる。振りむけば後続の生徒達の列と、そのはるか遠くに、早池峰山等の山々が雲の山に首をだしているのは、海に浮かぶ孤島といった趣きがあり、とてもすばらしい気分になれる。不動平から頂上までの道は、足場が悪く、かなりきつい登りだった。山頂では、校旗が建立してある所万歳三唱の後、校歌を斉唱し、下山をするが、帰りもきついコースで気を引きしめ、おそるおそる下る。

御花畑から松川温泉までの下りは、かなり長かった。意外とハイペースで下っているのだがなかなかつかない。

この下りのコースはみんなかなり元気で下って行ったが気を抜いて行くと、道の横から出ている木の枝でコブをつくることがあるので注意しながら下っていくと、やがて、松川温泉に着く。とうとう来たか、という気持ちと疲れがどっと出た。

温泉につかると、今日出会った苦しいことや楽しかったことが色々と思い出されて、全員無事だったことと、山を征服したという満足感が味わえ、とても有意義な一日だった。

春季校内体育大会

六月二十六日、雲一つない青天の下で昭和五十六年度春季校内体育大会が行われた。

各競技とも白熱したゲーム展開となり盛り上がった大会となった。

成績は次の通り。

リレー
一年　一位　一C
二年　一位　二D
三年　一位　三E

中学
綱引き
一年　一位　一E
二年　一位　二E
三年　一位　三D
柔道
一年　一位　一A
二年　一位　二E
三年　一位　三A
バレーボール
一位　バスケットボール　三A
バスケットボール
一位　卓球　二C
卓球
一位　ハンドボール　教員
ハンドボール
一位　ソフトボール（中学のみ）　三甲
ソフトボール（中学のみ）
一位　総合　三A
総合
優勝　二D
準優勝　三D

進路指導に思う

池口杜孝先生

人の一生が、高校時代に概ね方向づけられてしまうなんて、そんな馬鹿げたことがこの世にあっていいものか。もっといろいろなことをやってみろ。誰の人生でもないお前自身の人生だ。自由に伸び伸びと生きようじゃないか――こんなことが誰にも遠慮なく言えて実際にそんな高校生活が展開できたらどんなにかすばらしいことであろう。私がこの学校に勤めた三十年頃は、本気でそんな助言を確かにしていた。そして今、新しい高校教育の方向は、ある意味でそこにもどろうとしている。いくらか希望がもてそうだ。

世の中は生き物である。時の流れと共に変化して当然である。あるいは弁証法的発展であると言い、あるいはまた三十年を周期に繰り返されるとも言う。時勢と言うものはおそろしい。時にはガリレーのように、真実さえも曲げなければならなくなるし、聖人とあがめられた孔子でさえも批難の的となることもある。高校教育が進学指導に重点を置くのもまた然りである。子供の教育権は親権者にあり、学校教育者はその意を帯して教育をしなければならないと法は定める――これだって人間が決めることなんだが――世の中の大方の親は、わが子に有名な大学に進んでほしいと願う。中にはとんびが鷹を生んだような希望さえしてくる。鷹にならなければならない子供も気の毒だが、練金術師にならなければならない教師もいい面の皮である。

しかし本校の場合は大いに異なる点がある。確かに進学指導に力を入れ、公立校には見られない努力もしているが、それは単に進学率を高めるためのものではなく、本校の創立の主旨に合致するからである。東北のこの岩手から有為の人材を世に送り出すことに学校設立の目的があるならば、移り変るこの世において、大学を出てこそその目的が達成される可能性は高いと言わねばなるまい。実際本校に入学して来る諸君の多くは、これまた時勢のせいで、学校の名誉のためか、区分自分の名誉のためか、区分けする中学の先生や親の希望に、交通整理されたように公立校を受け失敗し、止むなく入学してはいるものの、それは一時の結果、まだ発揮されない能力を隠している人はかなり居るのである。そうした諸君を世に送り出し、いささか伯楽になったような気分になるのも本校教員の楽しみである。単純に考えて見たまえ、一高だってそうだが、三高四高に合格しても、二流三流の大学になんとか言う者が結構いる。その高校に不合格だった者は、それより下の大学で当り前ならばなんだが、結果は進学資料等で見る通り、公立失敗してかえって発奮し良い結果を招いている例は沢山あるのである。

要はやる気を出すか、出さないかであり、そのやる気を出すためには、しっかりした自分の将来のビジョンが出来ているかどうかである。人生にやり直しがない。かと言って、これが人生だと言うバタンもない。勇気を持って一つの道を選ぶしかない。そして、苦しくとも前進してこそやがて光がさすであろう。いつまでも振り出しにもどっている双六には上りはない。しかし照明灯のようにずっと遠くまでは見通せなくとも、すぐ足もとを照らす人間の知恵という提灯は皆持っているはずだ。強弱の差はあれその明りですぐ一歩前は判断できる。水たまりや、穴に落ちないように進むことはできるはずだ。時には両親がその提灯のかわりをしてくれたはずだし、進路指導に関しては教師がその役目を果たしているわけだ。どうせ相談したって……と早急に自分で結論を出さず、聞いて判断する、結論を出すのは諸君自身なのだから、もっともっと教師を利用するべきである。混迷と言われるこの世の中でしっかりと足もとを見定めながら生きなければならないのも時勢なのだから。

55年度後期奨学金授与される

去る四月九日の始業式に昨年度後期成績優秀者十四名に奨学金が授与された。授与者は左記の通り。

第三学年　本多　好郎
田村　望
小笠原和博
笠原　謙一
太田　隆司
第二学年
斎藤　博美
高橋　亨
吉田　敦
畑山　誠
永井　栄一
熊谷　幹雄
菊池　祐一
第一学年
荒川　雅之
小野寺文雄
川田　実

編集後記

石桜新聞第八十九号をお送りします。

今号は編集や記事集めの時間が不足していたために急ごしらえ的な出来になってしまいました。

今回の紙面は一面のトップに石桜会新役員の記事（毎号毎号同じ記事がトップにくるという批判もありますが…）と教生インタビューを、二面には高校総体、岩手山登山、それと今回は池口先生の特別寄稿を配しましたが、編集時間の無さがたたってしまい二面などは写真も少なく、全体に余裕のない、きちきちの構成になり、残念に思います。

次号はもっと編集にかける時間を増やし、内容的にも充実し、かつ斬新な構成の新聞にして、他校にも誇れるような石桜新聞にしていきたいと思います。（T）

※　※　※